

河野哲也 著
『境界の現象学：
始原の海から流体の存在論へ』

筑摩書房 2014年 四六判 240頁 ¥1500(税抜)

土屋陽介

学術誌に掲載される書評としてふさわしくないことは承知の上で、あえて本書を读了して筆者が抱いた個人的感想を述べるころから本稿を始めたい。本書で展開されている「流体の存在論」とは、著者である河野哲也の生き様そのものである。筆者は本書の読書中、著者と交わした私的な会話や学術的な議論の数々を具体的に思い出し、その背後に横たわっていた著者の精神にふれて、何度となく種明かしをされたような気分になった。もっとも、個人の個々の発話の背後に不可視で同一な「精神」が隠れているという考え方自体、本書で批判的に検討されている「剛体の存在論」の発想そのものであるので、著者であれば筆者のこのような受け止め方に抵抗感を示すかもしれない。

本書で著者は、西洋哲学の伝統的な世界像を支えているのは「剛体の存在論」であると指摘する。剛体の最大の特徴は、内側と外側とを隔てる確固不動の境界が存在していることである。明確な境界が存在しているからこそ、剛体は各々が独立した存在物として自己同一性を保持できるし、境界が生み出す剛体の不可視性から「質料／形相」や「身体／精神」という観念も生まれる。しかし、私たちの住んでいるこの世界は、じつは剛体からできてはいない。不動に思える大地も、長期的に見れば絶えず変動する地殻の一部にすぎず、陸海空の関係も絶えず入れ替わる。このような視点から見れば、私たちの生きる地球は「流体」（海洋惑星）であり、私たちの生活世界も、境界が存在せず内も外もない流体の存在に満ち溢れていることに気づくことができる（剛体は流体の一時的形態にすぎない）。このように「流体」を「剛体」に先立つものとしてとらえ、流体を存在物のモデルとする世界像が、「流体の存在論」である（ち

なみに、このような世界像の背後にも、著者の生き方、たとえば、著者がセイラーとして圧倒的な流体のリアリティを日々体験していることなどが強くにじみ出ているように筆者には思われる）。

本書は、流体の存在論の立場から、世界のさまざまな現象をとらえなおし、伝統的な世界像にとられない新しい世界の見方を描き出そうとするものである。その作業は、「流体の存在論」を確固不動の原理として、そこから体系的に演繹するような仕方では（たとえばドイツ観念論のように）行われぬ。哲学をそのようにとらえること自体が、すでに剛体的な発想として批判されるべきだからである。本書では、ファッション、慢性痛、狩猟、都市、家といった、私たちの生活にとって身近な、しかし一見すると何の共通性もないように思われる体験を丁寧に記述していくことで、それらの中に含まれているさまざまな「流体」性を炙り出すという方法が採られている。この意味において、本書の手法は「現象学」そのものであり、少なくとも著者にとっての現象学は、「流体的な哲学の方法」と呼ぶこともできるかもしれない。

本書では、教育に関する考察はほとんど行われていない。しかし、流体の存在論の観点からすれば、世界はつねに可動的なものであり、そのような世界における教育では、絶えず変化する環境に合わせて流動的に自分自身を変化・調整していき、ダイナミックな適応力（レジリエンス）を高めることが最重視されるはずである。知識の習得も大切だが、流体の存在論からすれば、知識とは本質的に可謬的であり、人間が環境に適応するために作り出した暫定的な道具であることを忘れてはならない。以上のことから、本書で著者は、境界を乗り越えて移動を繰り返し多様な経験を積み重ねることと、その経験を他者と語り合うことで自分たちのあり方を反省的にとらえかえすことの重要性を強調している。現在、著者と筆者は、ともに首都圏の複数の学校で、子どもの哲学（哲学対話）の実践を繰り返しているが、このような対話教育の実践に著者が取り組む背景にも、世界を「流体」としてとらえる著者の世界像が現れていることを、見逃してはならないだろう。